

## 今年度の取り組み②

### 子ども自らが考え、動きを工夫する支援の充実

紀 村 修 一

#### 1 子ども自らが考え、動きを工夫する支援とは

体育科では、それぞれの運動がもつ特性に子どもがふれながら、運動の楽しさや喜びを膨らませていくことを大切にしたい。そのためには、子ども自らが考え、動きを工夫していくことが必要である。なぜなら、子ども自らが考えることで、「もっとやってみたい」「もっとうまくなりたい」という思いや願いを実現しようと運動に取り組むことができるからである。また、動きを工夫することで、体の基本的な動きの種類を増やしたり、「多い回数できるようになった」「楽にできるようになった」など、上手な体の動かし方に気付いたりすることができるからである。

このように、子ども自らが考え、動きを工夫することで、子どもは、それぞれの運動の特性にふれるだけでなく、より主体的に運動の楽しさや喜びを膨らませていくことが期待できる。

そこで、今年度は、上記の主張点を掲げ、以下のような視点をもって支援を行うこととする。

- ① 体づくり運動との出会い方の工夫
- ② 動きを工夫する視点の明確化
- ③ 振り返りの工夫

#### 2 実践事例 「いいね、その遊び①」 ～体づくり運動～ (第3学年)

##### (1) 授業の構想

##### ① 求める「学びを実感する子どもの姿」

- ◇ 体づくり運動に取り組む中で、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、繰り返し運動しようとしている
- ◇ 体づくり運動を繰り返す中で、体の基本的な動きを身に付けたり、仲間と動きを工夫したりしている
- ◇ 仲間と動きを見合ったり、アドバイスし合ったりする中で、体づくり運動における工夫の視점에気付き、仲間の動きを自分の動きに取り入れている
- ◇ 体づくり運動を振り返り、自分の動きを見つめたり動きを工夫したりすることのよさを感じ、これからの学習に生かそうとしている

##### ② 学びを実感する子どもの姿を導くために

- ア 単元をとおして、体ほぐしの運動に取り組む場を設定する。そうすることで、運動の得手不得手に関係なく、仲間と運動を楽しむことができるようにする。
- イ 多様な動きをつくる運動では、工夫の余地が十分にある基本的な動きを示す。そうすることで、もっと楽しくなる方法を考えながら夢中になって動きを工夫することができるようにする。

ウ 運動を工夫している子どもを見取り、紹介する。そうすることで、全体で、工夫の視点を共有できるようにする。

エ 子どもから出てきた工夫の視点を類別して板書する。そうすることで、工夫の視点を明確にし、新たな動きに取り組むときの手がかりとなるようにする。

オ 毎時間の終末で、工夫した運動やそのよさを交流する場を設定する。そうすることで、動きを工夫すると、より運動の楽しさが膨らむことを感じることができるようになる。

### ③ 目標

○ 動きを工夫しながら、体づくり運動に楽しく取り組み、体の基本的な動きを身に付けることができるようにする。

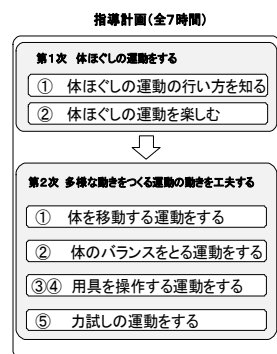
○ 仲間と動きを見合ったり、アドバイスし合ったりすることをおして、仲間と協力して運動する楽しさを味わうことができるようにする。

## (2) 子どもの学びの実際

※波線は思考力が発揮された子どもの意識、下線は前述の支援との対応を表す

本単元は、低学年の運動遊びで身に付けた動きに新たな動きを取り入れて、動きを一層広めながら高めることを追究していく学習である。子どもや学級の実態を把握するために事前に行ったアンケートでは、以下のような結果が出た。(男子18名、女子17名)

- |  |
|--|
| ①体を動かすのが好きです(「はい」…男子16名、女子16名)                           |
| ②自分は運動するのが得意だと思います(「はい」…男子8名、女子8名)                       |
| ③「もっと走るのが速くなりたい」「体が柔らかくなりたい」などの目標があります(「はい」…男子16名、女子17名) |



①②の結果から、体を動かすのが好きだが、運動するのが得意ではないと感じている子どもが多いこと、②③の結果から、運動するのが得意ではないと感じているが、目標をもっている子どもが多いことが分かった。このような実態を受けて、子どもが自分の目標をもち、夢中になって体を動かす中で、「運動するのが得意になった」と感じることができるよう学習という、単元の方向性を定めた。

子どもたちは、今できる動きで運動に取り組む中で、「どうしてもっと楽しくなるかな」という問いをもち、動きを工夫する。その中で、子どもたちが考えた工夫の視点を全体で共有することができるよう支援を行った。ここでは、子どもたちが、運動に出会い、仲間と運動することを楽しんだ第1次と、追究意欲を高め、主体的に動きを工夫した第2次第1・3・4時を中心に、子どもの学びの姿を記す。

### ① みんなで運動するのは楽しいな [第1次の学び]

まず、単元の導入では、どの子どもも楽しめる手軽な運動や律動的な運動(=体ほぐしの運動)に取り組む場を設定した。【支援ア】すると、全員が体ほぐしの運動に意欲的に取り組むことができた。その後、どんな体ほぐしの運動をやってみたいかを聞いた。

すると、多くの子どもは、「みんなで力を合わせる運動をしたい」

「音楽を流したい」と答えた。そこで、運動を行う順番や行い方、流す音楽などを話し合うように促した。話し合いの後、運動を行う中で、「もっと前につめたら全員が平均台に乗れ



体ほぐしの運動

るよ」「『せえの』っていう掛け声を掛けてみようよ」という子ども同士の声掛けが聞かれ、あたたかい雰囲気の中でオリジナルの体ほぐしの運動を楽しむことができた。また、一つ一つの動きがうまくできるようになるにつれて、笑顔で運動する子どもが増えてきた。このような活動をとおして、仲間と共に動きを工夫すると、運動がもっと楽しくなることに気付いたのである。

## ② みんなで動きを工夫すると楽しくなるね【第2次第1時の学び】

第2次第1時では、体を移動する運動に取り組んだ。まず、A児とT児を指名し、体育館の壁から反対側の壁に移動するように促した。【支援イ】すると、二人とも歩いて移動した。そこで、「今とは違う方法で戻ってごらん」と声を掛けると、A児は走って、T児はスキップで移動した。その様子を見ていた他の子どもたちから、「もっと違う方法がある」と声が聞こえたので、いろいろな移動の仕方を自由に試す時間を設定した。【支援イ】子どもたちは、実際に動いて試す中で、くま歩き、はいはい、おしり歩き、ケンケンなど様々な移動の仕方を楽しく見付けていた。また、そのような仲間の姿を見て、真似をする子どもも多く現れ、楽しく自他の動きを高めていった。このようにして運動を繰り返す中で、もっと楽しい運動にするために、仲間と協力して動きを工夫する姿が見られるようになった。以下に、あるグループのやりとりの様子を示す。

T児（個人でスキップを繰り返した後）スキップ飽きたな。

教師 あっちのグループを見てごらん。何をしているのかな？（手をつないで走っているペアを示す）

### 【支援ウ】

O児 二人で手をつないで走ってるね。

Y児 みんなで手をつないでスキップしたら楽しくなるかもしれないよ。

K児 できるかな。

Y児 スピードを合わせないと手が離れるから、横を見ながらやろうよ。

T児 「せえの」って言ったらスタートね。

この場面では、個人で同じ動きを繰り返すことに満足していないT児の思いに対し、他のグループの動きを参考にしたY児が、人数を増やしてみることを提案した。その結果、Y児を含む5名全員が、人数の工夫をしたことにより、運動の楽しさをもっと味わうことができたのである。



手つなぎでスキップ（人数を工夫）

このグループの学びのよさを見取り、【支援ウ】授業の終末では、工夫した動きと、その感想を伝え合う場を設定した。【支援オ】すると、Y児が「みんなで手をつないでスキップをしたら、一人でやるより楽しかった」と発言した。この発言をきっかけに、人数を工夫すると運動がもっと楽しくなるということ、みんなが知ることができた。

## ③ 動きの工夫の仕方が分かってきたよ【第2次第3・4時の学び】

第2次第3・4時では、これまでに子どもたちが見付けた工夫の視点を確認した上で、【支援エ】用具を操作する運動を紹介した。まず、教師が玉入れ用の玉を真上に投げてキャッチする動きを演示し、【支援イ】子どもたちにやってみるように促した。子どもたちは、板書を見て、工夫の視点を思い出しながら、3



工夫の視点を類別した板書

人組になつたり（人数を増やす）、しゃがんでキャッチしたり（姿勢を変える）、玉が浮いている間に何回手をたたけるか教えたり（ゲーム化する）して運動を楽しむことができた。その中で、S児のグループは、さらなる工夫の視点を見付け、動きを工夫する姿が見られた。以下は、そのときの様子である。

教師 どうやって遊びましたか？

S児 片手でキャッチしました。

K児 高く投げて、片手でキャッチしました。

教師 どうして高く投げて、片手でキャッチしたの？

S児 難しくなるから。両手だったら絶対に落ちないけど、片手だと落ちる可能性もあるし。

教師 難しかったら楽しくないんじゃないの？

S児 難しいのをチャレンジするのが楽しい。

上のS児とK児のやり取りから、今できる動きで運動を楽しむ中で、「どうしたらもっと楽しくなるかな」という問いを追究し、「高く投げる」「片手でキャッチする」という工夫を考えたことが分かった。また、S児の発言から、子どもたちはやや難易度の高い課題に挑戦しようとしていたことが分かった。



タイミングジャンプ（速さを工夫）

このことは、第4時での、フラフープやボールを操作する運動でも見られた。一人の子どもがフラフープを床で滑らせ、もう一人の子どもがその中にジャンプして跳び込む「タイミングジャンプ」では、フラフープを滑らす速さやフラフープの大きさ変えたり、ジャンプして跳び込む人数を増やしたりする姿が見られた。このことから分かるように、子どもたちは、工夫の視点を意識しながら、夢中になって仲間と動きを工夫する中で、用具を操作する動きを楽しく身に付けることができたのである。



タイミングジャンプ（人数を工夫）

### 3 実践を振り返って

本実践では、今できる動きで夢中になって体を動かす中で、動きを選んだり、よい動きを見付け自分の動きに取り入れたりする子どもの姿が見られた。その際、「工夫の視点」を明確にしたことで、子どもたちは、人数や姿勢、方向などを変えながら、新たな動きに取り組むことができた。今後も、子どもたちが、このような視点を持ち、全体で共有し生かしていくことで、楽しく運動に取り組むことが期待できる。

また、グループを意図的に設定したことで、子どもたちは、仲間ともっと楽しくなる方法を考えながら動きを工夫することができた。しかし、「もっと簡単な動きにして、みんなができると楽しくなる」「もっと難しい動きにして、達成感を味わった方が楽しくなる」など、同じグループでも異なる思いや願いをもっていったために、同じ目的で仲間と共に動きを工夫することに難しさを感じている子どもの姿が見られた。

今後は、子どもたち一人ひとりの思いや願いが生かされ、自分の目標達成に向かって夢中になって体を動かすことができる支援の在り方について研究を進めていきたい。